

福岡・筑紫女学園大学 東日本大震災被災地で現地研修

9年で25回訪問 「学生たちの心の大きな糧に」



宗門校・筑紫女学園

2012年2月から始

大学(福岡県太宰府市)は2月28日から5日間、東日本大震災で甚大な被害を受けた福島、宮城、岩手の3県でボランティア活動を伴う現地研修を実施。学生13人が参加した。

2012年2月から始
めた。学生ボランティア
アとして現地を訪れ、
被災者の体験談を聞
き、厳しい現実を見つ
めることで人間性や社
会性を養ってもらおう
と継続して行い、今回
で25回目を迎えた。

研修は、建学の精神「親鸞聖人が明らかにされた仏陀(釈尊)の教えに基づき、宗教部
の教員らが中心となり

を訪問し、浪江町・常
福寺の廣畑恵順住職の
案内で、3年前に避難
指示が解除された同町
の現状を学んだ。
また、南相馬市・勝

縁寺での津波被災者との交流会では、学生たちが博多名物の水たきを振る舞った。2年前の夏にも参加し同寺に宿泊した藤野真帆さん(22)は、同寺門徒の浜田早苗さんとの再会を喜びあった(写真)。
藤野さんは「前回お宅にお邪魔してから、メールで交流を続けてきた。震災から9年、ニュースで報じられることも少なくなり、世の中からは忘れ去られようとしているが、筑女ボランティアで学んだことを人と人とのつながりの中で伝えていきたい」と語った。

同大学は、震災後9年を区切り今回で活動を終え、震災10年にこれを総括する記録誌を発行する予定。学生を引率した栗山俊之教授は「現地研修に参加することで進路が変わり、生きる意味が見つめる学生もいる。さまざまな方のご協力をいただき、学生たちの大きな心の糧となっている」と話した。

(8面に関連記事)